



Title	死の悪のエピクロス主義と殺人の不正さ
Author(s)	佐々木, 渉
Citation	年報人間科学. 2025, 46, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100514
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈論文〉

死の悪のエピクロス主義と殺人の不正さ

佐々木 渉

要旨

死の悪のエピクロス主義は、死は死の本人にとって悪ではないとする立場である。エピクロス主義の課題の一つは、「死が悪ではない」という考えが、私たちの日常的な考え方や道徳的実践と矛盾しているように思えることである。とりわけ、殺人が不正であることをどのように説明するのかは、大きな課題である。なぜなら、死が死の本人にとって悪ではないとすれば、誰かを死に至らせることが、その人に害を与えたことになるとは言い難いからである。そのため、現代のエピクロス主義者たちは、さまざまな方法で死の無害性と殺人の不正さを両立させる説明を与えることに腐心してきた。しかし、いずれも決定的な成功を取めているとは言い難い。

この点、ティム・ブルクハルトは、従来の議論とは異なるアプローチでこの両立をはかろうとする。ブルクハルトは、たとえエピクロス主義者であっても、エピクロス主義に誤りがある可能性を完全に排除できない以上、殺人を不正と考える理由があると論じる。ブルクハルトの論証は、成功すれば、エピクロス主義の強力な擁護となる。

そこで、本論文では、ブルクハルトの論証を検証し、4つの問題点を指摘してこれを退ける。そして、エピクロス主義者は未だに殺人の不正さを十分に説明できておらず、この点がエピクロス主義を否定する十分な理由となると結論づける。

キーワード

倫理学、死、エピクロス主義、死の悪、殺人の不正さ

1. はじめに

古代哲学者のエピクロスは、かつて次のように述べて、死が死の本人にとって悪であることを否定した。

だから、死は、もろもろの災厄のなかでも最も恐ろしいものとされてはいるが、実は、われわれにとって何ものでもないのである。なぜなら、われわれが現に生きて存在しているときには、死はわれわれのところにはないし、死が実際にわれわれのところやってきたときには、われわれはもはや存在していないからである。したがって死は生きている人びとにとっても、また死んでしまった人びとにとっても何ものでもないのである（エピクロス 1994 p.301）

現代の多くの哲学者は、エピクロスの結論に反対し、死が悪であることを擁護しようとしてきた。しかし、関連する議論は硬直気味であり、完全な解決には至っていない。一方で、一部の哲学者はエピクロスの結論に共感し、それを現代的に発展させて擁護してきた。このように、「死が当人にとって悪ではない」という立場は、現代では「エピクロス主義 (Epicureanism)」と呼ばれ、さかんに議論される立場の一つとなっている¹⁾。

ここで、エピクロス主義の課題の一つは、「死が悪ではない」という考えが、私たちの日常的な考え方や道徳的実践と矛盾しているように思えることである²⁾。とりわけ、殺人が不正であることをどのように説明するのかは、大きな課題である。なぜなら、死が死の当人にとって悪ではないとすれば、誰かを死に至らせることが、その人に害を与えたことになるとは、(直ちには) 言い難いからである。

もちろんここで「死は悪くないので殺人も不正ではない」と結論づけることは可能である。しかし、そのような立場を説得的に擁護するのは難しい。そのため、現代のエピクロス主義者たちは、死が害ではないことと殺人の不正さを両立させる説明を与えることに腐心してきた。しかし、いずれも決定的な成功を収めているとは言い難い。

この点、ティム・ブルクハルトは、従来の議論とは異なるアプローチでこの両立を諮ろうとしている (Burkhardt 2020)。ブルクハルトは、たとえエピクロス主義者であっても、エピクロス主義に誤りがある可能性を完全に排除できない以上、殺人を不正だと考える十分な理由があると論じる。ブルクハルトの論証は、エピクロス主義の含意から直接殺人の不正さを導こうとしない点で、斬新であり、また成功すれば、エピクロス主義の強力な擁護となりうる。

そこで、本論文では、ブルクハルトの論証を検証し、4つの問題点を指摘して、これを退ける。そして、エピクロス主義者は未だに殺人の不正さを十分に説明できておらず、この点がエピクロス主義を否定する十分な理由となると結論づける。

議論の流れは以下ようになる。まず第2節では、本論の議論を進めるために必要な予備的な事項を整理する。第3節では、ブルクハルトの論証を取り上げ、この論証が従来の説明と比べてなぜ強力なのかを説明する。第4節では、ブルクハルトの論証に対して4つの問題点を指摘して、これを退ける。第5節では、以上の考察をまとめ、結論とする。

2. 予備的考察

本節では、まず、以降の議論で前提となる5つの事柄を整理する。さらに、殺人の不正さとエピクロス主義の関係について、既存の応答を確認し、問題点を整理する。

2.1 5つの前提

以降の議論では、次の5つの点を前提とする。

第一に、本論では、人は死ぬと存在しなくなるとする。この考えは、しばしば終焉テーゼ (Termination

Thesis) と呼ばれる (Feldman 2000)。すなわち、ある人は死ぬと存在しなくなり、死後に何らかの形で人生が継続したり、死体として存続したりすることで害悪を被ることはないものとする。

第二に、本論で議論する「死の悪」³⁾ は「ある人の死」という出来事そのものの悪のことを指しており、死にゆく過程に伴う苦痛の害とは区別される。すなわち、エピクロス主義は、ある人が死に際して経験する苦痛が、害となることを否定していない。

第三に、本論で議論する「悪」はその悪を被る主体にとっての価値を表し、主体以外の人にとっての悪については議論していない。すなわち、エピクロス主義は、ある人の死が、その家族や友人など、当人以外の人にとって、悪となることを否定していない。

第四に、死の悪は、主体の福利 (well-being/welfare) と結びついている。福利とは、ある人の人生やその一期間が、その人自身にとって、どれだけ良い状態にあるかを示す価値であり、道徳的な価値とは区別される。なお、殺人の「不正さ」 (wrongness) については、道徳的な不正を指す。

第五に、エピクロス主義に反対する主要な立場として、剥奪説 (deprivation account) がある。剥奪説とは、次のようにして、死の悪を擁護する立場である。

剥奪説：ある人 S にとって S の死が悪いのは、もし S が死ななければ得られたはずの福利の総量が、実際に得られた福利の総量を上回る場合、またその場合に限る。(e.g. Bradley(2009 p.50), Johansson(2013 p.257), Feit(2016 p.139))

剥奪説によれば、ある人の死の悪は、もしその人が死ななければ享受したはずの人生の良さに等しい。例えば、私が明日死んでしまうとする。そのことによって、私は、死ななければ楽しめたはずの来月の旅行のような、将来の良いものを失ってしまう。このことが死の悪を構成する。剥奪説は、さまざまな問題が指摘されているものの、多くの論者によって支持されている。

2.2 現代のエピクロス主義

エピクロス主義は、死が害でも利益でもないとするため、私たちの日常的な考え方や道徳的实践と著しく矛盾するという問題に直面している。そこで、現代のエピクロス主義者たちは、死が無害であるという立場を守りつつ、常識的な回答を維持する方法を模索する。

私の考えでは、中でも殺人の不正さが最も深刻な課題である。その理由は二つある。第一に、殺人が不正であることは、明白に正しいと考えられるからである。例えば、ハリー・シルヴァーステインは、殺人の不正さについて考える際、エピクロス主義の含意は、「私たちのこの問題に関する熟慮された判断に、深刻な大混乱をもたらす」 (Silverstein 1980 p. 413 n.8) と批判している。殺人の不正さを十分説明できない理論は、それだけで棄却に値する。

第二に、ジェフ・マクマーンが「殺人が最も悪質な犯罪であるのは、それが引き起こすものが一般的に最も深刻な害、すなわち、死だからである。」 (McMahan 2002 p.95) と述べ、また、ドン・マーキスが「誰

かを殺すことが不正であるのは、もっぱら、殺人が犠牲者にありうる最大の喪失（の一つ）を負わせるからである。」(Marquis 1989 p. 189) と指摘しているように、殺人の不正さは死が重大な害であることと不可分だと考えるのが自然だからである。エピクロス主義は、こうした自然な見解に明らかに挑戦する。

それゆえ、本論文では、もっぱら殺人の不正さについて扱う。

2.3 殺人の不正さと現代のエピクロス主義

本節の残りの部分では、殺人の不正さの問題に関するエピクロス主義の従来の応答とその問題点について、簡潔に確認する。

2.3.1 ハーシノフの応答

デイビッド・ハーシノフは、エピクロス主義者は、生の良さに着目することで、殺人の不正さを擁護できると主張する。

それゆえ、死が死者にとって悪いということは理解可能ではないが…[中略]…追加の人生は彼らにとって良いはずだと言うことは、とてももつともらしい。なぜなら、彼らは利益を享受するものとして、存在したはずだからである。そして、誰かを殺す人は、ひどく不正なことをしたのである。この不正さは、死者を害することにあるのではなく、死者が追加の人生を享受することを妨げることにある。(Hershenov 2007 p.177) ⁴⁾

ハーシノフによれば、たとえ死が悪ではないとしても、享受できたはずの追加の生が良いものであれば、死はそうした良いものを得る機会を妨げる。そして殺人は、犠牲者に害をもたらさないとしても、追加の生という利益を享受する機会を妨げるため不正である。

ハーシノフの擁護の問題点は、その主張が剝奪説の説明とほとんど変わらない点にある。トラヴィス・ティーマーマンは、生死に関する重要な問題について、エピクロス主義と剝奪説は「単なる言葉上の論争」(merely verbal disputes) に陥っていると主張する (Timmerman 2019)。ここで、単なる言葉上の論争とは、次の事例のように、ある問いをめぐる争いが、実際には、当事者間の用語の使用法についてのみの争いにすぎないことをいう。

単なる言葉上の論争：A氏は、150 ha 以上の面積を「広い」と呼び、B氏は80 ha 以上の面積を「広い」と呼んでいる。A氏とB氏が「大阪大学吹田キャンパスは広いかどうか」という問いについて議論をしている。A氏は「広くない」と答え、B氏は「広い」と答えるが、両者は吹田キャンパスの広さ（およそ100 ha）については争っていない。

このとき、「吹田キャンパスが広いかどうか」という問いに関するA氏とB氏の見解は対立しているが、

論争は実質的ではない。なぜなら、この論争は「広い」という言葉をA氏とB氏が異なる意味で用いていることのみによって生じているからである⁵⁾。

このことを踏まえて、ティーママンはハーシノフを次のように批判する⁶⁾。ハーシノフの考えを敷衍すると、ある人Sは、もし死ななければ良い人生を送ることができた場合、またその場合に限って、追加の生の良さを享受したはずである。しかしこれは、「死ななければ得られたはずのSの福利の総量が、実際に得られた福利の総量を上回る場合、またその場合に限って」、Sは、死によって利益を妨げられると主張しているのと同じである。すなわち、ハーシノフは、剥奪説に基づいて死が悪いと言える場合、またその場合に限って、追加の人生の良さが妨げられると述べているに過ぎない。すると、ハーシノフは「追加の人生の良さが妨げられること」を「悪」と呼ぶかどうかということについてしか、争っていないことになってしまう（単なる言葉上の論争になってしまう）。

だが、私の考えでは、ここでハーシノフは、まさに「追加の人生の良さが妨げられること」を「悪」や「害」と呼ぶかどうかということに、実質的な論争が残存していると抵抗しうる。例えば「何かが比較によって悪と言えるためには、その状態は比較可能な価値をもたなければならない」という主張はもつともらしい。すると、「Sが死んでいる状態」が、「もし死ななければ享受できたはずの生の状態」よりも悪いというためには、両者が比較可能な価値をもつ必要がある。しかし、Sはもはや存在しないため（終焉テーマ）、死後になんらかの福利の価値をもつとは考えづらい。ハーシノフの用語法は、こうした帰結を回避しうる⁷⁾。

しかし、たとえハーシノフが、このように両者の論争が実質的であると反論したとしても、その主張は場当たり的であるとの批判を免れない。ハーシノフは、生きている間の行為の不正について、「その行為がなければ得られたはずのSの福利の総量が、実際に得られた福利の総量を上回る」ことを理由に、その行為を害だと説明できるため、生の良さの妨害に訴える必要はない。したがって、殺人の不正についてのみ、害ではなく良さの妨害に訴える説明は、ハーシノフの理論に不統一をもたらしてしまう。

2.3.2 スマッツの応答

ハーシノフが、殺人の不正さを犠牲者のもつ害以外の価値に訴えて説明するのに対して、アーロン・スマッツは、何かが不正であることは、必ずしも犠牲者のもつ福利によって説明される必要はないと指摘する。

さいわい、無害主義 [= エピクロス主義] はそのような馬鹿げたことを一切含意しない。無害主義は、単独では殺人が道徳的に悪くはないとは含意しない。この結論に至るためには、福祉主義(welfarism)、すなわち、規範倫理学は、福祉 (welfare) [= 福利] だけに関係するべきである…[中略]…という見解も受け入れなくてはならない。しかし、もし、私たちが福祉主義を拒否…[中略]…するならば、このような馬鹿げた含意は回避されうる。(Smuts 2012 p. 220, [] 内は筆者による補足)

スマッツは、道徳性が個人の福利によってのみ決定されるという、福祉主義が否定されれば、死の害を

否定することが即座に「殺人は不正ではない」という結論に結びつくわけではないと主張する。そして、実際、福祉主義には、福利の水準が低いことは、必ずしも道徳的に問題があることを示していないという批判や、個人のもつ価値以外の価値を軽視しすぎているといった問題が指摘されている (Keller 2009 pp. 89-90)。

しかし、私の考えでは、この方針には二つの問題がある。第一に、たとえ福祉主義が誤りであるとしても、個人の福利が道徳性に全く関与しないと考えることは難しい。この場合、「ある行為の道徳的不正さは、少なくとも部分的には、犠牲者にもたらす福利に根拠づけられている」という弱められた主張はもっともらしい。エピクロス主義は、このような主張まで否定することはできない。

第二に、福祉主義を認めないとしても、エピクロス主義がどのようにして殺人の不正さを擁護するのかは不明確である。これについて、実際、スマッツは「もっと多くのことが述べられる必要がある」(Smuts 2012 p. 220) と述べるにとどまっている。

この点に関して、私の考えでは、二つの可能な応答がある。一つの応答は、殺人の不正さを犠牲者自身ではなく、その周囲の人々に与える害に基づいて説明することである。すなわち、ある人を殺すことは、その人の友人や家族、ひいては社会全体に損失を与えるために不正であると説明しうる。しかし、こうした説明は、大量虐殺は、残された人々にとってのみ悪いに過ぎないというもっともらしくない帰結を導いてしまう (cf. Yourgrau 2000 p. 55)、天涯孤独な人や、周囲から憎まれている人を殺すことの不正さを説明できないといった問題もある (cf. Marquis 1989 p. 189)。それゆえ、犠牲者以外への害のみによって、殺人の不正さを根拠づけることはできない。

もう一つの応答は、殺人の不正さを別の価値によって根拠づけるのではなく、倫理的直観に訴えたり、独立した原則だと考えたりする方法である。この方針は、2.3.3において検討する。

なお、スマッツは、福祉主義を完全には否定しない立場も提案している。スマッツは、「死は悪ではないが、より良くもない (less good)」(p.220) と考えることで、殺人が犠牲者にとって少なくとも望ましい状態ではないことを示そうとする。しかし、この考え方は、ハーシノフによる擁護とほぼ同様の問題を抱えることになる。死は「より良くない」という主張もまた、それが「死ななければ得られたはずのSの福利の総量が、実際に得られた福利の総量を上回る場合、またその場合に限り」成立するのならば、殺人が不正かという問題に関して、剥奪説と単なる言葉上の論争にとどまるからである⁸⁾。

2.3.3 バーリーの応答

マイケル・バーリーは、殺人の不正さは、そもそも正当化を必要としないと主張する (Burley 2010)。

バーリーは、ナイジェル・プレザンツによる「基礎的道徳的確実性」(basic moral certainty) という考えを援用する。ここで、「基礎的確実性」(basic certainty) とは、「物理的対象が急に現れたり消えたりしないこと」や「私が月に行ったことはないこと」のような、一切疑いの対象となりえないような事態に対して私たちがもつ態度のことである⁹⁾。基礎的確実性の対象は「疑問や疑念、テストを免れ、検証、肯定、証拠や根拠、理由への訴えかけを超越する」(Pleasants 2009 p. 670)。そして、基礎的道徳的確実性とは、道徳的判断や実践についての基礎的確実性のことを指す。

プレザンツによると、「死が悪であること」と「殺人が不正であること」の双方は、基礎的道德的確実性の対象となる事態である。両者は、それ以上正当化することはできないし、その必要もない。一方、殺人が不正であることは、それが犠牲者に死の悪という甚大な害を与えることと密接であり、両者は「内的関係によって結びついている」(internally related) という (Pleasants 2008 p. 257)。

プレザンツは、殺人の不正さは死の悪と密接であるにもかかわらず、剥奪説をはじめとする、既存の死の悪の理論が、殺人の不正さがもつような確実性を備えていないことを問題視する。例えば、剥奪説は、死は常に悪いものではなく、状況に応じては悪ではないことを含意するが、こうした帰結は、殺人の不正さがもつ普遍性や確実性とは一致しない。そこで、プレザンツは、殺人の不正さと強く結びつく、死の悪そのものもまた基礎的道德的確実性の対象であり、それ以上正当化の必要がないものだと考えるのである。

一方、バーリーは、殺人の不正さが基礎的道德的確実性の対象であることについては、プレザンツの考えに同意しつつ、死の悪が基礎的道德的確実性の対象であることを否定する (Burley 2010 pp. 71-94)。バーリーは、剥奪説をはじめとする死の悪の理論の帰結が状況依存的で、殺人の不正さがもつ確実性や普遍性を備えてないのは、そもそも両者が独立しているからだと考える。むしろ、殺人の不正さは、死の悪とは無関係だと考えることで、その確実性が一層強固になるようなものである。

そして、バーリーは、殺人の不正さがこのように死の悪と独立して確実である以上、死の悪を否定するエピクロス主義者であっても、この考えを採用しようと主張する。バーリーによれば、死の悪を否定することは、なんら殺人の不正さを脅かさない。

バーリーの擁護は、ハーシノフやスマッツのように、「生の良さの妨害」や「より良くはない」といった特殊な価値論に訴えることがなく、犠牲者以外の害に訴えることもないという点で、優れている。しかしながら、バーリーの立場にも、少なくとも二つの問題点がある。第一に、「基礎的道德的確実性」というアイデアそのものが十分明確でなく、問題含みであることである。実際、「基礎的道德的確実性」がどのようなものかについての論争は継続している。Pleasants (2015) によれば、基礎的道德的確実性には、経験的確実性から離れた道徳的確実性は存在しないという批判や、基礎的道德的確実性は特定の言語ゲームを共有したローカルな共同体においてしか成り立たないという批判があるという (Pleasants 2015 p.199, 203)。こうした批判が正しければ、プレザンツやバーリーが期待するような殺人の不正さに対する確実性は、大きく後退してしまうだろう。

第二に、こうした基礎的確実性に訴えかける戦略は、死の悪と殺人の不正さの関連を過小評価してしまう。ブルクハルトが指摘するように、私たちは殺人が不正であると考える一方で、ダニを殺すことは不正ではないと考えるし、自衛のためにやむを得ず行った殺人であれば必ずしも不正ではないと判断する傾向がある (Burkhardt 2020, p. 191)。

こうした傾向は、犠牲者が害を被るかどうかが、殺人の不正さを(少なくとも部分的に)基礎づけていることを示している。私たちが殺人を不正とみなし、ダニを殺したり、机を壊したりする行為を(それほど)不正とみなさない理由は、後者の行為では「誰も害を被らない」からである。ある行為に害が伴うかどうかは、私たちの道徳的判断において重要な基準となっている。しかし、バーリーの基礎的道德的確実性の

枠組みにおいては、このような状況依存的な不正さの評価が十分に説明できない。バーリーは、殺人が基礎的道徳的确实性であると主張する一方で、犠牲者が害を被らない場合や状況をどのように扱うかについて曖昧である。この結果、殺人が不正であることが确实であると述べることはできても、ダニを殺したり机を壊したりする行為が不正でない理由を十分に説明することができなくなってしまう。それゆえ、バーリーの擁護は、私たちの実際の倫理的直観や実践を適切に反映できていない点で、不十分である。

以上のように、エピクロス主義者による従来の応答は、いずれも十分とは言えない。

3. ブルクハルトの論証

ティム・ブルクハルトは、これまで見たような応答とは異なる論証によって、エピクロス主義と殺人の不正さの両立を擁護する。本節では、この論証の内容となぜそれが強力なのかを順に確認する。

3.1 論証の概観

ブルクハルトは、マイケル・ヒューマーによる道徳的实在論に関する論証を参照しながら、次のような論証を構成する (Burkhardt 2020 sec. 3)。

- (1) もし、エピクロス主義が偽であると知っていれば、私たちは人を殺してはならないという、一定程度までの、主観的な、犠牲者に影響を与える道徳的理由をもつはずである。
- (2) さまざまな証拠を考慮すれば、エピクロス主義は偽である可能性がある (could be false)。
- (3) (1) と (2) より、私たちは人を殺してはならないという、一定程度までの、主観的な、犠牲者に影響を与える道徳的理由をもつ。

ここで、道徳的理由とは、ある行為の正/不正に関して、主体がもつ考慮 (considerations) のことである。道徳的理由には、「一定程度までの (pro-tanto) 理由」と「全てを考慮した上での (all-things-considered) 理由」がある。前者は、ある行為をするにあたって一定程度まで生じる理由であるのに対して、後者は関連する全ての要素を考慮した結果、得られる理由である。例えば、甘いものが好きな友人にチョコレートを渡せば、友人は満足するだろう。したがって、私には友人にチョコレートをあげるべき一定程度までの理由があると考えられる。しかし、もしその友人が糖尿病を患っているなら、チョコレートを与えることは最終的に友人の健康を害してしまう可能性がある。その場合、私には、チョコレートをあげるべき全てを考慮した上での理由はないだろう。

さらに、ブルクハルトは、理由の効力 (force) が生じる源泉によって、犠牲者に影響を与える (victim-affecting) 理由と、他者に影響を与える (other-affecting) 理由を区別する。前者は、ある行為のターゲットとなる受容者の利益にその効力が由来しているが、後者は、関連するそれ以外の人の利益にその効力が

由来する。

このような区別のもとで、ブルクハルトは、上記の論証の各前提がもっともらしいことを確認する。まず(1)に関して、私たちは、もしエピクロス主義が偽であると知っていれば、死が死の当人にとって有害であると知っていることになり、殺人がその害を引き起こす行為であることを知っていることになる。ならば、主観的観点からは、殺人が不正であると考え、一定程度までの、犠牲者に影響を与える理由をもつと言えるはずである。

(2)に関して、ブルクハルトは、「認識的確率 (epistemic probability)」の考えを援用する。ヒューマーによれば、認識的確率 (以下、単に「確率」と呼ぶ) とは以下のようなものである。

ある命題は、それを信じる決定的な正当性 (可能な限り強い正当性) がある場合、またその場合に限り、「確率」の認識的な意味において、確率 1 をもつ。これは、何かが存在するという命題や、2 は 3 より小さいという命題など、せいぜいごく少数の命題にしか当てはまらない。命題が確率ゼロであるのは、それを否定する決定的な正当性がある場合、またその場合に限る。それゆえ、私は存在しないという命題は、1 は 4 に等しいという命題と同様に、(今の私にとって) 確率ゼロである。一般に、確率がゼロである命題は、矛盾しているか、さもなければ不条理なものだけである。(Huemer 2013 p. 262)

ヒューマーは、ここから道徳的実在論の確率がゼロではないと論じるが、ブルクハルトは、エピクロス主義が偽である確率がゼロではないことを導く。ブルクハルトによれば、私たちは、エピクロス主義が真であると考え、決定的な証拠をまだもっていない。そしてそれは、エピクロス主義者自身にとっても同様である。それゆえ、エピクロス主義者にとっても、反エピクロス主義者にとっても、エピクロス主義が真である確率は 1 より小さく、それが偽である可能性は否定できない。

そして、(3)に関して、ブルクハルトは、たとえエピクロス主義者が、エピクロス主義が真であると信じていたとしても、犠牲者の利益を損なう行動を抑えるべきだと考えるならば、エピクロス主義が偽である可能性を排除できないだけで、殺人を抑えるべき、一定程度までの、主観的な、犠牲者に影響を与える道徳的理由をもつと主張する。ブルクハルトはこのことを、次のような殺人以外の例を用いて示そうとする。

パウロとその友人たちは、彼の誕生日をピニャータ割り¹⁰⁾でお祝いしている。パウロは目隠しされて、バットを与えられ、友人たちは彼がバットを振るのを後押しする。ここで次のような命題がある。もしパウロがバットを振れば、彼の友人であるドロレスは怪我をするだろう。この命題を DI と呼ぶことにする。もしパウロが、DI は真だと知っていれば、彼はバットを振るのを抑える理由をもつはずである。そして、パウロは DI が真だと信じるための少なくともいくつかの理由をもっている。パウロは…[中略]…目隠しされているため、彼女が正確にどこにいるかはわからない。ひょっとすると、ドロレスは、パウロがバットを振ると辿るはずの弧の中にいるかもしれない。それゆえ、彼がもつ証

抛によれば、DIの可能性は、ゼロより大きい。それゆえパウロはバットを振るのを控える理由をもつ。
(Burkhardt 2020 p. 183)

パウロは、自分のバットがドロレスに当たるかもしれないという証拠をもつだけで、バットを振るべきでないと考える道徳的理由をもつ。このことは、実際にパウロのバットの射程範囲にドロレスがいるかどうかに関わらない。エピクロス主義者についても同様に、もし、エピクロス主義が、死は害ではないことを含意し、エピクロス主義者にとってはそれが最も確からしい理論だとしても、彼らが犠牲者に害を与えたくはないと考えていて、エピクロス主義が誤っているかもしれないという証拠（死が害であるかもしれないという証拠）をもつならば、殺人を控えるべき、道徳的理由をもつ。

3.2 ブルクハルトの論証の強み

私の考えでは、ブルクハルトの論証には、従来のエピクロス主義擁護に比べて、次の3つの大きな強みがある。

第一に、ブルクハルトの論証は、ハーシノフやスマッツのように、殺人の不正さを「生の良さ」のような、害や悪以外の価値に訴えることなく、殺人の不正さを説明することができている。そのため、剝奪説との間で単なる言葉上の論争に陥ったり、不統一な説明を行ったりすることがない。

第二に、ブルクハルトの論証は、反エピクロス主義的な立場が正しい可能性から殺人の不正さを説明しているため、出来事の有害性と不正さの結びつきを維持できている。すなわち、殺人が不正であることは、(少なくとも部分的には) 死の悪に根拠づけられているという重要な直観を損なうことがない。

第三に、ブルクハルトの論証は、殺人の不正さをエピクロス主義以外の立場から導くため、どれほど極端なエピクロス主義の立場に対しても適用可能である。ハーシノフやスマッツをはじめとして、現代のエピクロス主義者の多くは、死が悪ではないという主張をなんらかの形で弱めることを余儀なくされてきた。ブルクハルトの論証が正しければ、エピクロス主義者は、殺人の不正さを維持しながら、より極端な立場でさえ擁護することが可能になる。

このように、ブルクハルトの論証は、従来のエピクロス主義者の応答と比べて、より有力な擁護を提供している。

4. 反論

ブルクハルトの論証は、エピクロス主義にとって新たな擁護となり得るが、私の考えでは、この論証には依然として問題が含まれている。最大の問題点は、ブルクハルトの擁護は、エピクロス主義者の行為理由に対する擁護であって、エピクロス主義そのものの擁護になっていないことである。以下では、まずこの点を明確にし、続いて3つの関連する問題点を指摘する。

4.1 エピクロス主義者に対する擁護とエピクロス主義の擁護

私の考えでは、ブルクハルトの論証は、エピクロス主義を支持する者が殺人を不正だと考える理由を提供しているにすぎず、エピクロス主義が殺人の不正さと両立することを示せてはいない。たとえ、エピクロス主義を支持する全ての行為者に、殺人を不正だと考える理由があるとしても、そのことはエピクロス主義という理論が殺人の不正さと両立することとは、全く異なるからである。殺人の不正さを説明できない理論は、明らかに問題含みである。ブルクハルトの論証は、エピクロス主義がそのような問題含みな理論であるという主張を一切論駁していない。

とはいえ、ブルクハルトは、エピクロス主義を擁護するためには、エピクロス主義者が自らの行為を十分常識に適合させることを擁護するだけで十分だと考えているのかもしれない。以降では、このような主観的な理由の擁護が、理論的にも実践的にも不十分であることを3つの点から確認する。

4.2 全ての立場に適用可能な反論がエピクロス主義擁護と言えるか

ブルクハルトの論証は、エピクロス主義が誤っている可能性から、殺人の不正さを導いている。ここで、エピクロス主義が、まだ確立された理論でないという事実は、立場によって変わらない。すると、ブルクハルトの理論は、エピクロス主義者だけではなく、全ての立場の支持者にとって利用可能なものである。すなわち、ブルクハルトの論証が正しければ、全ての立場の支持者について、殺人を抑えるべき理由があることになる。このとき、このような論証は、本当にエピクロス主義を擁護したと言えるのだろうか。

このことを別の角度から確認してみよう。「パスカルの賭け」は、神が存在していれば信仰によって無限の幸福を得られるが、存在しない場合でも信仰による損失は限定的であるため、人は神を信じる合理的な理由をもつとする議論である。パスカルの賭けは、神が存在するかどうかにかかわらず、神を信じるべき理由があることを擁護したとは考えられているが、神が存在することを擁護したとは考えられていないだろう。私の考えでは、同じように、ブルクハルトは、エピクロス主義が正しいか否かにかかわらず、殺人を抑えるべき理由があると示しただけで、(エピクロス主義を擁護したのではなく)単に「どんな行為者にも殺人を抑えるべき理由がある」ことを示したに過ぎない。

4.3 利用できる死の悪は、適切な帰結を導くか

ブルクハルトの論証において、エピクロス主義者は、自身の見解が誤っている可能性を受け入れることで、殺人の不正さを肯定する。ここでは、エピクロス主義が誤っている可能性だけでは、殺人の不正さを説明するには、実践的に不十分であることを示す。

バーリーやプレザンツが指摘するように、剥奪説は殺人の不正さと常に一致するような死の悪を提供しない。例えば、犠牲者に残された命がわずかである場合、剥奪による死の悪は大きなものとはならないが、だからと言って、高齢で虚弱な人を殺すことのほうが、若い人を殺すことよりも遥かに不正ではないと確信できる人は少ないだろう (cf. Burley 2010 p.78, Pleasants 2009 p. 674)。すなわち、剥奪説であっても、必ずしも殺人が不正である場面と死が悪である場面を一致させることはできていない。すると、エピクロスが誤っている可能性だけでは、適切な場面で死の不正さを擁護できないという疑念が生じる。

しかし、この指摘に対してブルクハルトは、次の2つの観点から応答しうる。第一に、ブルクハルトの論証は、一定程度の理由を与えるに過ぎないため、たとえ死の悪に基づく理由が十分でないとしても、他の観点からそれを補完することができる。

第二に、ブルクハルトの論証は、死の悪に関する理論として剥奪説だけを前提としているわけではない。直観的に正しい結果を得るために、その都度最も適合する死の理論を重視することことで、必要な結論を得ることができるかもしれない⁷⁾。

私の考えでは、この応答には次のような問題が残存する。それは、どの「死の害」の理論を参照するかが、結局は主体のもつ証拠に依存する点である。このことは、主体の判断や証拠の重みづけによって結論が異なることを意味する。すると、異なる死の害の理論が乱立する状況において、妥当な判断を得るために、毎回最適な理論を選び、優先させることが本当に可能かどうかは疑わしい。また、そうした状況で、いつも都合よく望ましい結論を導けるような、適切な認識的確率分布が得られる保証もない。

しかしながら、ブルクハルトはこのような批判をある程度想定し、次のような方針を示唆する (Burkhardt 2020 p.182 n.8, pp.186-187)。すなわち、関連する命題Pの認識的確率に閾値を設定し、閾値より大きい値では等しく強い理由が生ずるとする方針である。さらに、この閾値を0とすることで、私たちはどのような場面でも、少なくとも一つ死の悪を説明する理論を知ること、殺人を抑えるべき理由を得ることができる。

だが、私の考えでは、このような応答は、次のような不合理な帰結を免れない。すなわち、例えば、「ダニには実は弱い感覚系があり、ダニの死はダニの良い生を剥奪する」という説が、少しでも正しい可能性があると認識するだけで、行為者は殺人を抑えるべき理由と同じくらい強い、ダニを殺すべきでない理由をもつことになってしまう。このように閾値を設定する方針は場当たり的で、実践的に有用な解決とはいえない。

4.4 エピクロス主義が正しい確率の影響

最後に、ブルクハルトの論証が正しいとすれば、エピクロス主義が正しい可能性を排除できないことも問題となることを示そう。

例えば、安楽死について考える。エピクロス主義が安楽死に関してもつ含意には争いがある。例えば、Taylor(2012)は、死が悪でないとする、安楽死は患者に害を与えないため、安楽死を(安易に)肯定する理由になると考える (Taylor 2012 pp.108-109) のに対し、Skrzypek (2024)は逆に、エピクロス主義は、安楽死が患者に利益を与えることを否定すると指摘している。ここで、安楽死を施すかどうかは、殺人と同じくらい重大な倫理的判断である。医師は、患者に害を与えたくないと考え選択を行うだろう。このとき、エピクロス主義が正しい可能性は、「安楽死を施さないことで患者に与えてしまうかもしれない害」と「安楽死を施すことで患者に与えてしまうかもしれない害」が無視できないほど大きいことを帰結する。すると、ブルクハルトの論証と同型の論証は、医師の判断を困難にする。この論証は、死の悪に関するどの立場を支持するとしても、成立してしまうため、実践的倫理的判断を困難にする。このように、ブルクハルト

トの論証は、実践的・道徳的決定においては、むしろ不要な混乱を招きうる。

5. まとめ

本論の議論をまとめよう。エピクロス主義には、殺人の不正さをうまく説明できないという問題がある。この問題に対する、ハーシノフ、スマッツ、バーリーらによる従来の応答は、いずれも十分ではない。ブルクハルトの応答は、既存の応答にはない強みがある。だが、本論の指摘する通り、ブルクハルトの応答にも4つの問題点がある。それゆえ、エピクロス主義は未だ殺人の不正さに関して、もっともらしい正当化を提供できていない。殺人が不正であることは、私たちの日常的直観および道徳的实践に照らして、極めて重要なことである。それゆえ、エピクロス主義には重大な疑念が残る。

謝辞

本論文は、サントリー文化財団 2023 年度「若手研究者のためのチャレンジ研究助成」の支援を受けて執筆されたものです。また、本論文の草稿に有益なコメントをくださった2名の査読者と滋賀医科大学の加藤穰先生に感謝します。

参考文献

- [1] Bradley, B. (2009). *Well-being and Death*. New York: Oxford University Press.
- [2] Burkhardt, T. (2020). Epicureanism and the Wrongness of Killing. *The Journal of Ethics* 24 (2): 177-192.
- [3] Burley, M. (2010). Epicurus, Death, and the Wrongness of Killing. *Inquiry*, 53(1): 68-86.
- [4] エビクロス (1994) 「メノセウスへの手紙」 デイオゲネス・ラエルティオス (1994) 『ギリシア哲学者列伝 (下)』 加来彰俊訳 岩波書店 所収
- [5] Chen, Y. (2018). From the Dachunniu to the Piñata: Tracing the Alleged Chinese Origin of a Mexican Tradition. *Fudan Journal of the Humanities and Social Sciences* 11: 69-81
- [6] Feit, N. (2016). Comparative Harm, Creation and Death. *Utilitas*, 28(2), 136-163.
- [7] Feit, N. (2021). Death Is Bad for Us When We're Dead. In Cholbi, M., & Timmerman, T. (eds.), *Exploring the Philosophy of Death and Dying*, Routledge: 85-92
- [8] Feit, N. (2023). *Bad Things*. Oxford University Press.
- [9] Feldman, F. (2000). The Termination Thesis. *Midwest Studies in Philosophy*, 24(1): 98-115.
- [10] Hershenov, D. B. (2007). A More Palatable Epicureanism. *American Philosophical Quarterly*, 44(2): 171-180.
- [11] Huemer, M. (2013). An Ontological Proof of Moral Realism. *Social Philosophy and Policy* 30 (1-2): 259-279.
- [12] Jenkins, C. S. I. (2014). Merely Verbal Disputes. *Erkenntnis* 79 (1):11-30.
- [13] Johansson, J. (2013). The Timing Problem. In Bradley et al.(eds) *The Oxford Handbook of Philosophy of Death*, Oxford University Press: 255-273.
- [14] Keller, S. (2009). Welfarism. *Philosophy Compass* 4 (1): 82-95.
- [15] Marquis, D. (1989). Why Abortion is Immoral. *Journal of Philosophy* 86 (4):183-202
- [16] McMahan, J. (2002) *The Ethics of Killing*, Oxford University Press.
- [17] Moyal-Sharrock, D. (2005). Unravelling certainty. In D. Moyal-Sharrock & W. Brenner (Eds.), *Readings of Wittgenstein's on certainty*, Palgrave: 76-99
- [18] Pleasants, N. (2008). Wittgenstein, Ethics and Basic Moral Certainty. *Inquiry* 51 (3):241-267.
- [19] Pleasants, N. (2009). Wittgenstein and basic moral certainty. *Philosophia* 37 (4):669-679.
- [20] Pleasants, N. (2015). If Killing Isn't Wrong, Then Nothing Is: A Naturalistic Defense of Basic Moral Certainty. *Ethical Perspectives* 22: 197-215.
- [21] Rosenbaum, S. (1986). How to be dead and not care: A defense of Epicurus. *American Philosophical Quarterly*, 23(2): 217-225.
- [22] Silverstein, H. S. (1980). The Evil of Death. *Journal of Philosophy* 77 (7): 401-424.
- [23] Skrzypek, J.W. (2024). Epicureanism and euthanasia. *Theoretical Medicine and Bioethics*. Online First.
- [24] Smuts, A. (2012). Less Good but Not Bad: In defense of epicureanism about death. *Pacific Philosophical Quarterly*, 93(2), 197-227.
- [25] Suits, D. B. (2020). *Epicurus and the Singularity of Death: Defending Radical Epicureanism*, Bloomsbury Academic.
- [26] Taylor, J. S. (2012). *Death, Posthumous Harm, and Bioethics*, Routledge.
- [27] Timmerman, T. (2019). A Dilemma for Epicureanism. *Philosophical Studies*, 176(1): 241-257.
- [28] Yourgrau, P. (2000). The Dead. *Midwest Studies in Philosophy*, 24(1): 46-68

注

- 1) エピクロス主義を擁護する文献として、Rosenbaum (1986), Suits (2020), Hershenov (2007), Smuts (2012), Taylor (2012) などがある。
- 2) エピクロス (主義) は、死が害であることを否定するだけでなく、利益となる可能性も否定する。この立場は、例えば、耐え難い苦痛に終止符を打つときには、死が、少なくとも一定程度までには利益をもたらす場合があるとする日常的直観とも両立しない。
- 3) この論文では、害 (harm)、悪 (badness)、害悪 (evil) を交換可能な語彙として使用する。また、良さ (goodness) と利益 (benefit) も交換可能な語彙として使用する。
- 4) 特にことわりのない限り、以降の引用文は全て拙訳である。
- 5) 単なる言葉上の論争の定式化については、Jenkins(2014) をみよ。
- 6) 厳密には、ティーママンは、(1) 死が、特定の意味において、死の本人にとって悪いかどうか、(2) 死に関して、人がどのような自己利益に関する理由をもつかという二つの問いに関して、ハーシノフと剝奪説が、「～にとって悪い」という語の使用法に関する単なる言葉上の論争に陥っていると主張する (Timmerman 2019 p. 252) 本論文では、同様の議論が「殺人が不正であるかどうか」という問いについても適用できることを示している。
- 7) この問題は現在では、死者が死後に福利をもつことが可能かどうかという形で争われており、Bradley (2009 pp. 98-111), Feit (2016, 2021) で詳細に論じられている。また、ハーシノフは退けているものの、死が無時間的に悪だと考えることでも、この問題は回避できる (Johansson 2013 cf. Hershenov 2007 pp. 173-5)。
- 8) ティーママンは実際、ハーシノフについて検討した問いと同じ問いに関して、スマッツと剝奪説が単なる言葉上の論争に過ぎないと指摘している (Timmerman 2019 p.253)。
- 9) 基礎的確実性は、ウィトゲンシュタインの『確実性について』に由来するが、用語そのものは、Moyal-Sharrock(2005 p. 78) によるものである (Pleasants 2008 p. 250, 2009 p. 670)。
- 10) ピニャータ割りとは、メキシコやラテンアメリカで、誕生日などに行われる伝統的遊びであり、陶器や紙で作られた容器にお菓子やおもちゃを詰め、参加者が目隠しをして棒で叩き割ることで、中身を取り出して幸運を願う風習である (Chen 2018 sec. 1)。

Epicureanism, Death, and the Wrongness of Killing

Wataru SASAKI

Abstract:

Epicureanism holds that death is not bad for the person who dies. One challenge to this view is that it seems to contradict our moral practices, particularly those concerning killing. If death is not harmful to the victim who dies, it becomes difficult to argue that killing someone is wrong because it harms the victim. For this reason, contemporary Epicureans have struggled to reconcile the harmlessness of death with the wrongness of killing. So far, none of these attempts has been successful.

Recently, however, Tim Burkhardt has put forward a novel argument. He argues that since Epicureans cannot entirely rule out the possibility that their view is false, they still have a moral reason not to kill. Burkhardt's argument thus seems to offer a stronger defense for the Epicureanism.

In this paper, I examine Burkhardt's argument and highlight four issues within it. Based on these issues, I conclude that Burkhardt's argument fails to sufficiently explain the compatibility between Epicureanism and the wrongness of killing.

Key Words : Ethics, Death, Epicureanism, Death, Wrongness of Killing